



鉚路体協だより

第60号

発行 鉚路市体育協会
平成23年3月31日

鉚路市スポーツ賞(10/29)



佐藤靖昌氏(鉚路スケート連盟)受賞



「水都くしろ」において永年にわたりスケートの普及振興に多大な貢献をされた鉚路スケート連盟副会長佐藤靖昌氏(77歳)が、今年度の鉚路市スポーツ賞を受賞されました。

佐藤氏は昭和32年に教職に就くと同時に鉚路スケート連盟に入会され、特に鳥取中在任中は地域のスケート普及のため、市内各学校のリンクづくりにおいて精力的な指導に当たられました。

その後、市内管内はじめ全道各地で教職員のスケート講習に携わる傍ら、スケート指導のための技能テキストを執筆して各学校に配布するなどスケート競技の普及振興に情熱を注がれました。

昭和49年には、フィギュアの普及のため約250名に対する講習の後、フィギュア同好会を設立し、現在の隆盛の基礎づくりをされました。

平成6年に理事長就任後は、全日本大会、インカレ、三度の国体、さらには鉚路初となる国際大会を招致開催して大成功に導くなど、鉚路市スケート界において誠に大きな功績を残されました。

鉚路市長・市議会へ(12/16)

体育施設の補修、備品整備要請

鉚路市体育協会は、新年度予算編成に向け、市内社会体育施設の補修改善・備品整備等の充実を求める要望書をまとめ、蝦名市長と二瓶市議会議長に特段のご理解とご配慮を要請しました。



スポーツ関係の13団体から上がった39項目の要望を盛り込んだ重点項目は、①湿原の風アリーナ鉚路の施設・備品等の整備、②大規模運動公園内体育施設の計画的な補修と更新、③社会体育施設の緊急性・安全性を踏まえた早期補修・改善などの3本柱でした。

当日は張江会長はじめ北村副会長、高橋専務理事の3名が出席。張江会長は2011年度から14年度まで毎年全道規模の大会が鉚路市で開催されることに触れ、「大会運営を円滑に効率よく進めるためにもぜひお願いしたい。」と熱意を込めて述べました。

体協初の取り組み(11/27)

赤い羽根共同募金活動

アイスホッケーアジアリーグの試合会場：鉚路アイスアリーナで、赤い羽根共同募金に協力を求める元気な声が響きました。



当日は張江会長はじめ、理事ら多数の役員が正面玄関に陣取り、日本製紙クレインズ-東北フリーブレイズの試合を観戦に訪れたファンに「ご協力をお願いします」と声を張り上げました。多くの来場者が募金に温かく応じたため、会場は赤い羽根であふれました。

この取り組みは、湿原の風アリーナ鉚路の建設時に市民から多くの資金援助を賜ったことに対する感謝の気持ちとして実施されました。

大会会場での募金のほか、加盟する39団体それぞれから協力を得た募金の合計額102,212円は、鉚路市体育協会と市民が一体となって取り組んだ成果として、12月15日に鉚路市共同募金委員会へお届けいたしました。

釧路
カレ
(1/8~9)

第83回日本学生氷上競技選手権大会



釧路での開催は、2005年の第77回大会以来6年ぶり4度目。スピード、フィギュア、アイスホッケーの3種目が実施されました。

1月6日～9日の4日間、柳町スピードスケート場はじめ5会場で、全国106校から集まった1,050人の選手が熱戦を繰り広げました。

フィギュア学生チャンピオンの小塚選手の演技や地元出身選手の活躍もあり、観客数は18,000人を数えました。



全道高校生、氷上で技を競う (12/15~17)

第63回北海道高校スケート競技・アイスホッケー競技選手権大会が12月15日から3日間の日程で開催されました。釧路管内からは約130人が参加しました。

アイスホッケーでは連合チームを含めて5校が出場。スピードやフィギュアでも地元選手が観客の応援に支えられ、堂々の活躍をしました。



全国制覇をめざし、中学生集う (2/4~6)

全国の強豪16校が集い、頂点を目指してアイスホッケーの第31回全国中学校大会が、2月4日から6日まで熱戦が繰り広げられました。地元釧路市からは2校が出場。景雲中学校は初戦の第3ピリオドで同点に迫りましたが、終盤に勝ち越しを許して東京都選抜に惜敗。全道制覇した鳥取中学校は準優勝を収めました。



普及事業の取り組み

鈞路スケート連盟 会長 栗林 定徳



昭和25年に発足し、設立60年目を迎えた当連盟は、鈞路管内のスケート競技者及び指導者等の会員(34団体：会員約150人)で組織され、講習会等や強化練習を行い競技力向上に努めています。

今年度はインターハイのスピード競技や全国中学のフィギュア競技で上位入賞するなど、強化練習の成果が表れた年であります。

一方、競技人口減少は深刻な問題であり、その打開策として夏期間のスケートクラブ活動を中心とした普及事業にも精力的に取り組んできた結果、今年度は26人の小学生が冬期間も継続して活動しています。

また、幼児飛び入りレースを取り入れた大会では、参加した12人の幼児が一生懸命滑走する姿に父兄はじめ競技役員からも「がんばれ！もう少しだ」の声援が飛び交い、何とも微笑ましく感じたものでありますが、さらなる競技人口拡大を推進しながら「氷都くしろ」の活性化につなげていきたいと思っています。

“氷都”を担う鈞路アイスホッケー連盟

鈞路アイスホッケー連盟 会長 足立 功一



現在、当連盟への加盟状況は134団体・2580名。内訳は、一般95(クレインズを含む)・大学2・女子6・高校8・中学6・小学15・少年団2である。

市営3、民間2のリンクにおける活動は、辛うじて“ライバル”苫小牧と並ぶ「氷都」の面目を保っているというところ…。

アジアリーグをはじめ小学生から一般までの各種競技を主管し、日常的な指導・普及と合わせて充実を図っている。

今季、全道・全国レベルの主な大会としては、全道高校、インカレ、全国中学等の競技を主管。熱戦が展開された。

課題としては、競技人口の漸減から目をそらすことができない。少子化による自然減もあり、小・中・高校とも単独チームの減少と合同チームによる参加が常態となっている。

インラインホッケーの普及、上部組織の流動化等、賢明な対応を求められる問題もあるが、今年度、懸案であったホームページを立ち上げた。これらを契機に更なる活動の充実を期したい。

「スキーは楽し！」

鈞路スキー連盟 会長 西田 孝



今年は例年に無い雪不足で、阿寒ロイヤルバレイスキー場・国設阿寒湖畔スキー場共々、コース整備には大変苦慮しました。しかし、予定通りオープンすることができ、真っ白いゲレンデをさっそうと滑走して、元気に楽しんでいる子供達の姿を見てホッとしました。

スケートがメジャーな鈞路では、なかなか競技選手が育ちません。連盟の課題として、一昨年よりジュニアやキッズの指導に力を入れており、指導者の先生方も、まずはスキーの楽しさを体験してもらおうと一生懸命です。

3月13日(日)は第65回冬季体育祭市民スキー大会ですが、「継続は力なり」をモットーにさらに努力していく所存です。

スキー・スノーボード指導員登録数

種目	指導員	準指	認定	合計
スキー	96名	40名	16名	152名
スノーボード	40名	27名		67名

鈞路市スポーツ少年団のご紹介

鈞路市スポーツ少年団 本部長 横地 敏光



東京オリンピックが開催された2年前の1962年に日本少年団が創設されその後、北海道スポーツ少年団そして1982年には鈞路市スポーツ少年団本部(事務局スポーツ課)が設立されました。

鈞路市では種目別スポーツ大会の開催支援(市長杯)や公認スポーツ指導者養成講習会や母集団研修会の開催、団員が参加するスポーツ交流会・体力テスト会やリーダースクールなど指導者協議会や母集団の協力を得て実施しております。

スポーツ少年団はスポーツを通して青少年の心と体を育てることを第一の目的として各種事業を推進しておりますが全道や全国大会でもトップレベルの成績を残すなど競技力向上にも一定の成果を残しております。

少子化や学校数の減少により単位団運営や大会参加等の課題もありますが、新たな種目団の加入等も見られて活動の幅が広がるとともに、今年8月には鈞路管内の事業としてドイツのスポーツ少年団との交流事業も予定されております。

湿原の風アリーナ釧路

昨年度を上回る利用実績

全道に誇る近代的な総合体育館として、平成20年の秋にオープンした「湿原の風アリーナ釧路」で、本年度は130の競技会（全国大会：1 全道大会：14）が開催されました。利用人数は目標であった20万人を越す結果となりました。

施設の高機能ぶりと合わせて、主管した各競技団体の優れた大会運営が高く評価され、いずれの大会も大成功を収めることができました。



管体協役員等研修会

(11/5～6)

釧路管内体育協会連絡協議会（管体協）主催の「役員等研修会」が阿寒湖温泉で開かれ、各市町村から19名が参加しました。



初日のワークショップでは釧路市社会教育主事の牧野氏、治田氏、阿寒生涯学習課社会教育主事の島山氏が講師となり、「競技スポーツにおける指導者の役割」について、グループ内協議を活用した解決への迫り方について学び合いました。

2日目の視察研修では、マリモ生息地を訪れ、「阿寒湖のマリモ」について、阿寒生涯学習課長補佐の若菜勇氏から解説をいただきました。

釧路市冬季体育祭総合開会式は「まなぼっと」で開催

(アイスホッケー・長靴アイスホッケー・カーリング・スキー・フィギュア) (12/10)

第65回釧路市冬季体育祭の総合開会式が、釧路市生涯学習センター多目的ホールで開かれ、集まった200名の選手らが熱戦を誓い合いました。

開会式では、昨年の覇者がそれぞれ優勝杯を返還。大会委員長の張江悌治釧路市体育協会会長から「試合を通じ友情を確かめ合いながら、試合そのものをエンジョイして」との激励がありました。

その後、釧路スケート連盟の中村優選手の力強い選手宣誓で、各会場で繰り広げられる熱戦の幕開けとなりました。同体育祭は3月までの冬期間中に、5つの種目が競技会を開催し、約2,500人の選手が参加しました。



冬季の各種目は、次の日程で行われました。

- アイスホッケー
12/20～1/28
(釧路アイスアリーナ他)
- カーリング 1/15～16
(柳町アイスホッケー場)
- 長靴アイスホッケー
2/19～26
(春採アイスアリーナ)
- フィギュア 3/5～6
(春採アイスアリーナ)
- スキー 3/13
(阿寒ロイヤルバレイ)



編集後記

風ゆるみ、梢の膨らみが間近の芽吹きを伝えてくる。ツルツル歩道から解放されたウォーカー達の腕の振りにも弾みがつく。厳しい冬の寒さや風雪にも、彼らはひるまなかつた▼ああ、ウォーカーよ、君に問う。君、何ゆえ歩きたもう？ 答えは明白、「だって好きなんだもん!」。「好きだから!」との理由づけは、十分に説得力がある。好きとか楽しいというだけで、意欲的になるし、長続きもする。スポーツは、本質的に楽しいものなのである▼釧路市はスポーツ環境の整備が進んでいる。湿原の風アリーナ釧路を筆頭に、数多くの社会体育施設が用意され、屋内外を問わず、多様な種目を行うことが可能である▼身近には学校のスポーツ開放がある。とりわけ各小学校ではスポーツを通じたコミュニケーションづくりのための地域開放がなされている。これを運営するのは校区内の「地域スポーツ推進協議会」。世話役としての地域スポーツ推進員の存在も心強い▼18万の釧路市民。誰もがスポーツ都市宣言市民としての自覚をもち、スポーツの楽しさや健康の喜びを実感しつつ、自らの生きがいをつくましく手練り寄せてほしい。